

校 報



昭和五年

七月號

7

ナ ゴ ヤ
電 氣 學 校

唐詩 安評 (三) 杏西散人

春 曉 孟浩 然

春眠不覺曉 處々聞啼鳥
夜來風雨聲 落花知多少

訓 春眠曉を覺えず、處々啼鳥を聞く、夜來風雨の聲、花
落ること知んぬ多少。

此詩は今更言ふまでもなく萬人に愛誦せらるゝ詩で詩意も
亦極めて明瞭であります。

意 春の夜明けの眠り心地にウトウトと睡つて居ると、諸
方に鳥の囀りが聞える、昨夜吹き降りであつたやうだか
ら、肝腎の花も大半は散つた事であらう。

仄韻を用ひたのであるが其れが『篠』と云ふ上聲の韻であ
る爲めに殆んど平聲と變りが無く至つて耳に和やかに響き
ます、殊に五絶に在つては起句は必しも同韻を踏まなくて
も差支の無い詩法上の自然則であるにも拘らず同韻を踏ん
で居る、其處が吟誦の上に復た一段の蔗調を呈する所以で
す。

結句の多少の少は言ふまでもなく助辭になる字で、支那で
は昔からタウセウ(多少)は去來と等しく兩面の意味に使用
せられ多い時にもタウセウ少い意味にもタウセウ、自由自
在に使はれます、即ち此句では多からうの意ですが前回引
例した『南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中』では残り少な
の樓臺といふ意で少い義に用ゐられて居ります。

朝寢坊の夢枕に續紛たる落花の聲を耳にす、苔徑爲めに消
えざる雪を残り玉砌自ら溶かさざる粉を施す、紅千點、白

萬星、林を隔つる禽語は啾啾として交響の樂を奏し苑を繞
る煙霞は冥濛として饒春の幕を展ぶ、柳暗櫻陰、香氣滿幅
絳氣醞釀す、這般の睡郷は眞に是れ樂郷、人若し此境に在
つて醉生夢死するを得ば蓋し詩人の本懐か非か。

登金陵鳳凰臺 李 白

鳳凰臺上鳳凰遊 鳳去臺空江自流

吳宮花草埋幽徑 晋代衣冠成古邱

三山半落青天外 二水中分白鷺洲

總爲浮雲能蔽日 長安不見使人愁

訓 鳳凰臺上鳳凰遊ぶ、鳳去り臺空しく江自ら流る、吳宮
の花草は幽徑を埋め、晋代の衣冠は古邱となる、三山半
ば落つ青天外、二水中分す白鷺洲、總て浮雲の能く日を
蔽ふが爲めに、長安は見えず人を愁へしむ。

意 昔此の金陵(南京)の地に鳳凰臺の建物の有つた時には
鳳凰が來て遊んだといふ話であるが、今は鳳も無く建物
も無くなつて(建物の土臺だけ高く残つてゐる)大江の水
ばかりが悠々と流れてゐる、昔爰に都を定めた吳の孫權
乃至夫差、美人西施などの榮華の夢を包んだ宮殿の跡も
人の通ふこと稀なる小徑となつて花や草やに埋れて居り
東晋百有餘年の間表冠束帶の王孫公子等の享樂の嚮も今
は古邱となつてしまつた、瞻仰ぐれば金陵近傍の三峰は
相竝んで巔を青天の上に没し、俯瞰すれば江水は二つに
岐れて中間に白鷺洲を作つてゐる、我は今此臺に登つて
此景を眺め更に千里の目を極めんと欲しても如何せん空
には浮雲が漂ふて天日を蔽ふてゐる爲めに、懐かしの故

郷長安を見たいと思つても望むことを得ず。我心快々として樂まず。

此詩は李白一代傑作として往古より推賞せられたものです。傳ふる所に據れば李白は其の前に黃鶴樓に登り一詩を賦せんとしたのでした。が時の詩人崔顥に先んせられ崔顥の詩の秀絶なるに驚き筆を投じて去つて金陵に到り此詩を得たといふ事で詩調も黃鶴樓の詩に似通つては居りますが私は崔顥の詩よりも寧ろ此詩を推したいのであります。

前聯の史的叙情も佳いことは勿論であります。が後聯の叙景は何んと謂つても空前の名句です。殊に落、分といふ動詞を一瀉建水式に使つて恰も軌上に滑車を走らすか如く圓轉流暢に二句を聯ねたる才筆は實に唐代の第一人者たるに反しない事を認めます。

此の一聯は、着想の順序から考へますと、先づ後句に白鷺洲の韵を押し、胸底別に前句に用ふべき三山の字を秘し、之に對する、二水の字を得躡いで、中分の字を按じて二水中分白鷺洲の一句を完成し、此句に凭れて、彼の胸底に秘したる三山の字を取出し三山半落青天外と拈出し得たのであらうと思はれます。

此の一聯は眞に此詩の核心でありまして之に因て全詩の詩趣が躍動して居ります。而して此の聯の核心はと言へば其れは半落、中分の四字に結晶せられて居ると言はなければなりません。取り分け我等後人を驚嘆せしむるに餘りあるものは實に半落の二字でありまして靈人の靈筆は正に雲飛び龍躍るの概が有ります。李白一たび此の二字を拈出してよ。り後代の詩人が競ふて此字を拜借するのを見ても如何に好

文字なるかを窺ひ知るに足りません。

次に前聯ですが、吳宮花草の花の字は是亦嘆賞するに餘り有る字で、人儻し吳宮と吟誦し來れば自ら腦裏に宮女花の如しと云ふ聯想を生ずるのは常人の常情であります。其處を巧に利用して吳宮の花と宮の字に襯接して花の字を据え、宮女花の如くなりし吳宮も……と思はしむべく筆を下したる技巧、入神の妙を感ぜざるを得ませぬ。

併し晋代衣冠成古邱の一句は遺憾ながら不服を言はざるを得ませぬ。先人は古人の詩文章と云へば一も二もなく推賞し追従するを常としますから此一句も東晋時代の衣冠東帶は皆古邱の土と化したとか又は衣冠東帶の人達の來往した衢は皆古邱となつたとか解釋して平氣で濟まして居るやうですが、一體此句はそんな意味に採れるでせうか。

第一成といふ字は自動詞として物の出來あがる、事を遂げるといふ義に用ゐ、更に同格の自動詞としては例へば雀海中に入つて蛤と成るといふが如く雀と蛤が同一人格である場合に用ゐらるゝ字ですから此句も衣冠と古邱とが當然同一人格となる筈です。則ち衣冠が古邱と成つたと解しなければならぬのです。が正さか晋代に衣冠を山に積んで古邱を築いた譯でもありません。其處で先人達はコチ附けて衣冠が古邱の土に化したと解して居りますが其れなれば成を歸に易へて歸古邱ととしなければ義が通じませぬ、そして、成も歸も等しく平字でありますから直した方が穩當に聞えます。

又衣冠東帶の人の來往した衢が古邱と成つたと解するには衣冠の二字では何うしても物足りませぬ。此解に従ふには

當然衣冠の二字を思ひ切つて棄て、林泉、園村、玉樓など(唐代に盛に使用せられたる字)の類の語を入れなければ成古邱とシツクリ合ひませぬ、けれども是等林泉などの字では衣冠の字が表はすやうな強い響きを與へませぬ、で私は何とか成案を得たいと思つて古くから相當苦心をして居りますが今以て良案に接しませぬ、が、已むを得ずんば金湯の二字に易へたらばと思ひます、『金湯の固めも粟に非んば守らず』と魏書に書かれてより以來金湯の二字は金城湯池の略語として諸書に用ゐられて居ります、則ち『晋代の金湯も古邱と成る』といふ句にするのです、斯うする時は金の字が衣の字よりは前句の花の字に多少對照を良くするやうな氣もしますが、何にせよ、人も有らう事か古今獨歩の李太白の句に加筆をするのでありまして僭越己を知らざるの罪萬死に値ひすることを自覺します。

去りながら『思ふ事言はざるは肚ふくる、業なり』とか古人も申して居ります故敢て前段の私見を述べたのであります、成らう事なら成を歸に改むるなどの姑息を採らず思ひ切つて衣冠の字を修正する良案の發見を大方に求めたいのであります。

最後の二句は浮雲を以て高力士、楊貴妃など自分を讒言した者等に喩へ、日を以て玄宗皇帝に喩へて、浮雲が太陽を蔽ふが故に私は斯く貶謫の身となり金陵あたりまでも漂浪の旅を續けて居るが今此臺に登つて懐しき長安を望まんと欲するも得ず我心獨り愁ふの意を僅かに二句十四字中に收め來つて讀む者をして悵悵江水よりも長からしめたる非凡の才藻は眞に是れ金玉玲瓏鳴り珞響き、耳底には音樂を

生じて魂をして月宮殿に飛ばしめ眼前には天華を散じて心をして紫微垣に到らしむるもので、我等は到底之に酬ゆべき贅辭を見出す事が出來ないのであります、殊に總の一字を以て馬上顧眄的に全聯を一括し更に能の一字を以て一派の諷刺を婉約に粉飾する處など宛然麻姑を倩ふて瘞きを搔くが如く一詠再詠遂に百詠を重ねるも猶且つ倦むことを知らざる底の好文文字であります。

光風軒遊草

中島 甲山

春興寺聽鶯

水浸殘寒柳繞城

太湖東去春興寺

峽中書懷

霸氣銷沈四百年

夜深唯聽窓前雨

大 阪

豪華競盛古難波

想昔高臺瞻望日

城頭懷古

百雉金湯扼海門

託孤寄命誰無淚

通 天 閣

不夜城南路幾叉

人間別有通天術

花朝霜雪易關情

聽得黃鳥第一聲

峽中仍見舊山川

獨對殘燈耿不滅

八百八橋人語譁

炊烟稀處帝憂多

豐公偉業八荒吞

遺恨元勳不報恩

衣香扇影簇輕羅

恍見雙星涉漢河

眞の賢人

二八四
卒業 神藤 均

凡そ賢い人とは如何なる人であろう。良く吾人はあの人は賢い人だ。あの人は成功した人だと言ふことを耳にするのである。或人は乞食の首に成つても、不良少年の團長に成つても首にさへなれば賢い者だと言ふ。又石川五工門のやうであつても名を残せば賢い人だと言ふ人もあるが、眞の賢人とは此の如き者ではない。それでは如何なる人かと諸君は眼を眩るであらう。僕は多少の自分の経験から眞の賢人とは自己を良く知つた人だと斷案を下して可なりだと思ふのである。良く見るのであるが、自分の分つて居ないと言ふ事すら分つて居ない人が多いのである。自己が分つた時は最早新しき光にスキッチを切り換へた時である。吾人の失敗は皆自己を知らない点に因つて來ると言つても大した間違は無いと思ふ。僕も實は自分は虫に等しき者である事を屢々味つたのであるが、時々其の時の事を忘れては失敗するのである。故に我等は時々刻々自己の眞相を知つて居れば、従つて常に敬虔な態度で居る事が出來るのであるが實は此の敬虔と言ふ文字は用ふ可きではないのである。何となれば敬虔であると言ふ事は自分の眞相を知つた立場に居るだけに過ぎないのであるからである。人から見れば敬虔であつても自分では少しも敬虔であると思はないのである。人から見ても敬虔であり度いと思つて装つた所で自己の分らない者には到底出來るものでないのである。では如何にせば我等は賢人に成る事が出來るであらうか、譬を以て之を説明して見やう。今僕が黒暗に拾錢の銀貨を落した事

にする、所が黒暗であるが爲に夜中努力して探しても分らないが明朝に成つて太陽の光に照された時、何の努力なくして見出す事が出來るのである。

要は自己の眞相を知るの己が努力でも鍛錬でもなく又修養でもない。只光に照らさるゝに他ならないのである。僕が電氣學校に入學した當時は實に手の付かない者であつた先生まで冷かして時々叱かられたのであつたが、僕は或時此のオールマイテイなる光に照されたのであつた。其の時こそ自己の眞相を視せられたのであつた。此の時以來光の中を歩む生涯に遷されたのである、此後僕に會ふ人々は僕の變化した事を痛切に感じたと言つて見て次の如く僕に語るのであつた。君の性格及び言葉まで全く變つた。そのやうに言はれ、ば僕でも内心喜ばずには居られないが、此れは只自己の眞相を幾分なりとも知つたこと即ち前に述べた所の光を受けた事に基くのである。

若し我等が努力修養によつて敬虔に成り賢者に成らんとするなら恐らく失敗に終るであらう。あの親鸞でも自己の修養鍛錬によりても罪に打勝つ事が出來ないと申してゐる。然れども一度光を受けた僕は神を懼るゝ事が出來る様に成つた。「エホバを懼るゝは智慧の本なり」とあるが事實である。神を懼るゝ事の出來ない者に罪に打勝つ事は出來ない又神を知らない者に罪の何たるかを知る事も出來ないであらう。神の國の一日は此の世の千日に勝る事を味ふのである、長い間の修身よりも教育よりも一度此の光に接した方即ち神を知つた方が遙かに勝るのである。是の故に深遠なる哲學にも奥妙なる理の中にも光はなく唯々神を知り事

のみが天地唯一の光である。何うしても僕の語る所の眞の賢人と成るには神を知ると言ふ所に歸着しなければならぬ。

教育の根本目的は神を知らせる爲であると教學者ベスタロツチは言つてゐる。ソロモンと言ふ賢王は世界に稀なる名君であつて智者であり學者であり其の富も亦量り難く其の榮華は前代未聞であり又後にも比較する者なき程であつたが一度僕と同じ光を受けた時「空の空なる哉凡て空なり風を捕ふるが如し」と言つてゐる。如何なる世の學者と雖も一度此の光に照さるゝと今まで自分は空しき事のみ爲して來たと叫ぶに到るのである。此れが即ち賢人の初でありまた全部に到るのである。

野間清治氏の『体験を語る』より

一体偉くなるのに一番必要なものは何であるか、それは學問ではない、才智ではない、其の人の品性如何である、操行如何である、畢竟人物如何である。

學問、才智が一番のやうに考へられたり持て囃されたりしたのは、世間一般の間違ひであつた。明治から大正に互つての、教育上の非常な誤解であつた。それが今漸く目が覺めて來た、其の弊害が段々露はれて來た。こゝで諸君は深く考へ篤と思ひ廻らさねばならぬ

一筋の道

五嵐山人

わが俳諧の詩聖芭蕉翁の心を、かの『芳野紀行』の巻頭の一文を中心として、辿つて見る。

『百骸九竅の中に物あり。かりに名付けて風羅坊と云。誠にうすもの、風に破れやすからんことを云にやあらんかれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす』と。

翁は、わが身の常に病に惱んでゐる姿を、薄いうすもの、風に破れ易いのにとたとへてゐた。翁は、自分の身の病あることを氣にしてゐたが、尙、それよりも深く自分の心の姿を常に凝視することを怠らなかつた。自分は元來『狂句を好むこと久し』と云つてゐる如くに、詩を愛する性癖のあることに氣づいてはゐた。やがては、詩を以て、生涯の生命とするに到る萌芽を認めてはゐたが、はつきりとそれを自覺したのは、晩年であつた。

『或時は倦で放擲せんことをおもひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非、胸中にたゞかうて是が爲に身安からず。』と。

是は正しく、翁の煩悶の心を如實に語つてゐるではないか。翁が、再び芳野に遊んだのは元祿元年で四十五の年であつた。すれば、この追憶は、彼れの過去の心の跡を自ら省みて、わが心の迷路を表現した言葉と見ねばならぬ。或時は倦んで、わが生命とも思ふ俳諧の道をも放擲しようと思へ迷つた。北村季吟にも就いた。國文の學者にでもならうかと考へたのであらう。それは翁の廿四五才の青年の時であ

つた。三十の時に江戸に出た。俳諧の世界を眺めて、一旗
 擧げようとの野心は勃々と心の中に燃え、いら／＼と競ふ
 心が渦いてゐたに違ひない。『是非胸中にたゞかうて、是が
 爲に身安からず』と、煩悶してゐるではないか。この三十
 一二の頃は彼が精神的にも物質的にも尤も苦酸を嘗めた時
 で、所々を流浪もし、時には水道吏にもなつてゐたらしい。
 一方に生活の資を求めつゝ、他方には苦吟してわが欲する
 詩作に耽つたのであつた。かうして兩つの道にさまようて
 迷霧に鎖されたのである。

然し、詩人的な性格を與へられた彼は、世俗的な生活を
 價值あるものと肯定することは出来なかつた。『自分の本當
 の道はどこに在るのか』と、自己への沈潜が始まつた。人
 生觀乃至宇宙觀を確立しなくては一日も生きてゐられない
 深い惱みに惱んだ。世上の名や利がそもそも何になるのだら
 うか。俳諧の上にわが生命を樹立するにしても、たゞ名を
 求めるのが、一生の目的だらうか。本當の生命とはそんな
 水の泡にも似た儚ないものだらうか。一たい、不滅の生命
 は、どうしたら求められるであらうか。自證を得たい。自
 ら眞理を悟らなくてはならぬと、かう沈潜した彼は、深川
 の大工町に在つた佛頂和尚に走せ參じて、心の救ひを求め
 たのであつた。それは三十八の時であつた。こゝに彼の參
 禪生活が始まる。眞劍に人生を考へるものは、無常の觀念
 を抱かすにはゐられまい。絶對の彼岸を思慕して自己の面
 目を徹見し、自證を獲得したいと願はぬものはあるまい。
 この宗教的の救ひを求めるときは人間本然のこゑである。
 芭蕉はこの時の自分の心を、

『しばらく學で愚を曉らん事を思ふ』と語つてゐる。
 禪に入つて自己の法性を自證し、自證を得ると共に自己
 の本性を本當に見出した彼は、自己の歩むべき大道は何處
 に在るかを認めたのであつた。深川に庵をその弟子から建
 て貰つたが、それは、幾度も火事に逢つて焼け失せた。一
 切を放下して、詩禪一致の境に入らうとしてゐた彼の心は
 こゝにいよ／＼無所住の決心を固くしたのであらう。行雲
 流水の心に住んで天下をわが宿とし、旅より旅へと流浪を
 することによつて、自己の身心を鍛錬し、詩の行に精進せ
 んことに大覺悟を定めたのは實に三十九から四十の所謂不
 惑の年頃であつた。この年より翁の精神生活は勃然として
 一大飛躍が起つた。一切を捨てた心は一切を所有したので
 ある。一切を空と觀じた時は一切は有である。靈源の妙境
 に徹し得て、古池の水音に無明の闇を打ち破つた彼には、
 最早、この身命を惜しむ凡夫心はなかつた。わが一道に直
 入する雄々しい元氣が全身に充滿するのを感じるのみで、
 他の邪思妄想は微塵もない。自己の道に進むそこにのみ自
 己が儼然と存在してゐる。天與の道はに、此の一筋である
 と自覺した芭蕉の歩みは一步一步と足跡をはつきりこのこ
 して行つた。四十一歳から五十一歳までの最後の十年間こ
 そ、翁の眞面目を如實に顯現してゐる。さうして最後、十
 年間の翁の生活こそは血のにじみ出るやうな眞劍の態度が
 益々加つた。奥の旅に上つたのは四十六歳の時であるが、
 この時の翁の眞劍さは、あの有名な『奥の細道』によく物
 語られてゐる。この紀行文を讀んで熱涙に咽ばぬものはあ
 るまい。

かく、翁の生涯の心の歩みを尋ねるとき、芭蕉の藝術が永劫の生命を有してゐるその源泉は、何處にあるかを、辿り得ると思はれる。翁自ら『終に無能無藝にして、只此一筋につながる』と自覺するまでの心の過程を、わが心の上で省みることによつて、芭蕉の詩の精神を本當に味ひ得ると思はれる。翁が詩の極致に達して、風雅の誠を悟り、造化の太玄に歸し得るまでの眞剣な生活態度をこそ、吾々は學ぶべきではあるまいか。

道元禪師曰く、
『佛法を習ふとは自己を習ふことなり。』と。

人々、本來の面目如何と脚跟下を點檢せねばならぬ。是れが目下の緊要事である。(昭和五年七月七日稿)

英語を英國民に返せ!

こわだ

□次に掲ぐるは文部省内英語教授顧問ハロルド・パーマー氏の言葉である。英語は日本の第二國語である。然し私が英國人と云ふ立場を離れて云ふならば、日本の第二國語としては、日本が「自然な」英國のフットボンド法をさらないで「人造の」メートル法を採用した様に、國語ではなく人造國語を第二國語としたいと思ふ。

□世界にかなり廣く(ほんとうはそれ程でもないのだが)使はれてゐる英語の本家本元たる英國に於て何故におんなにまでエスペランド運動が盛であるか?眞に英語(彼等にとつての國語)を愛する英國人は英語が國際語として使用されることに大に反對してゐる。外國人によつて語られるとき英語は次第に純粹な英語ではなくなる。英語が汚されて行くそれが彼等には堪られない。英國民のアメリカ英語に對する嫌惡の主要な理由はそれだ。

□新期の報道によると、ドイツでは各映畫劇場に於て自國の發聲映畫(勿論ドイツ語だ)が歡迎され、他國語のものは一旦ドイツ語に入れ直して後でなければ上映されないさうである。「英語の勉強になるから」などと外國語の學習をムヤミに大事がるごこの國の連中にきかせたい話である。

ヴォルトかボルトか?

小和田生

止むを得ずして國語の中へ導き入れる外來語の發音に就て氣づいたことを書いて見る。こゝでは周圍にふさはしいやうに例を電氣工學の範圍で Volt に採らう。云ふまでもなく問題は V と I とに在る。私の主張は、それが日本人のためめの日本語となつた以上——タバコやランプの如くにわれわれの日本語となつた後は——發音も亦日本語の特質によつて規定されることを承認すべく、従つて V が b の音に I が r の音に變ることを正當とするのである。この小さな一問題をとり上げるによつて國語、外國語問題に別の側面からの光を投ずることが出来れば幸ひである。

○日本語の發音の中には V や I に近似するものはない。(日本語同様ギリシャ語にもラテン語にも V の音はない。ラテンにある V の文字は英語の W に相當する。Vowel はウエリタスである。I の發音はあるが)従つてそれは最も近似的な音によつてとつて代られる。これは自然に推移するのであつて學者や知識階級の意識的な變更を俟つて然るのではない。いはゆる大勢の赴くまゝにである。言語の生きるに任せてである。ヴォイオリンはバイオリンにうつり行く。外國語意識の下にこゝさらにそれに反抗して V の發音を固執することは、それが未だ純然たる外國語であつて日本語でない、こゝの暴露以外の何ものでもない。

ヴォルトはボルトに移るのがそれが日本語となるための必然の運命なのである。

○英語のみを見てゐると國內に於ける外國語問題について片手落な考へ方をする危険がある。廣く世界の各國語の狀勢を見わたす必要がある。少くもヨーロッパ文明國の三四ヶ國の國語について展望を廣くしなくては偏見を免れぬ。私はその方面に暗いのではあるがこゝではドイツ語を例證にしてvとb、lとrとの推移置換の各國語それごとつての相對的な正しさを明かにして見やう。

○英語に於てvであるところがドイツ語にあつてはbとなつてゐる、實例の二三を左にあげる。ドイツ語の特質としてさうなつて行くのである。語原的に何れが先か、或ひは兩方共に他の國語に源を持つかはこゝには省くことにする。それらは語原辭典に就て見られたい。上段は英語下段はそれに當るドイツ語で最下に示す如き同じ意味を持つてゐる(動詞は不定形をさる)

(A)	(B)	
have	haben	持
give	geben	與へ
even	eben	平
live	leben	生
love	Liebe	愛
over	neben	越
fever	Fieber	熱
grave	Grab	墓
silver	Silber	銀

これは私が今一寸思ひ當つたものをあげたまでで、この他念入りに調べたら兩國語に於けるこのvとbとの對應が一の規則的な關係をもつこと、蓋然價値の法則にまで高まることを發見し得るであらう。なほfとv、pとbとが同系

の音である。self (life, live; leaf leavesなどの例を見よ)から次の如き對應關係も前出のもの、補ひとなるであらう。これはドイツ語に例が少いやうである(私の知る限りでは)

self	selbst	自
half	halb	半
off	ab	分
livre	libre	「離れて」の意
pe're	pater	父
	father	父
	librairie	「本屋」及び「小冊子」はvでなくbである。
	lip, (labial);	唇
	opras,	作品、仕事
	move,	mobil, mobilize, automobile

ところが同じフランス語の『本屋』及び『小冊子』はvでなくbである。lip, (labial); opus (opera, operation) 作品、仕事最後に同じ英語の中でbとvとの轉化の一例をあげる。

vital, biology, biography 等は皆語原が一つであるらしじ。O (ギリシヤ語 bios ラテン語 vita) O (ラテン語)の置き換へ、今すぐ多くの例に思ひ當らないのは残念であるが一つだけあげて見る。

Sabre (英) Sabre (法) Sabre (独) サブライバー
Sabel (ラテン) Sabel (独) サベル

○日本語として取り扱はる、所謂『漢語』は漢語とは云へその發音はすつかり日本語化されてゐるのである。(支那語に通じた人にたづねて見よ)英、獨、佛、伊、等々の國語の中語原的にギリシヤ、ラテンに發するものもそれごとく自國語固有の特性に應じて形態、發音、語尾の様式等を變じて自己の内へ同化してゐる。英語の中に入つては英語風に變化せしめられ、ドイツ語に入つてはドイツ語風に適應させられ

てゐる。その國語の特質に反する如き要素（語形にせよ、發音にせよ）はたとひ無理にとり入るゝもやがて消滅するその國語の中に生命をつゞけるためにはその國ぶりに改められて行くを要する。それは國語の歴史的な發展を注意すれば明かとなる事實である、試みに極端な一例をあげんか英語のチャーチ Church とドイツ語のキルヒ Kirche とがかくも甚しい相違にも拘はらず、語原を同じギリシヤ語 Kyriakon に發すると云ふことである。突然人爲的に新しき種類の發音を一國語の中へ導入しやうとしてもそれは決して行はれるものでない。日本語にvの音fの音iの音の導入は國語の發音の特質を無視する強行であつて到底行はるべからざるではない（カフィー(Cafe)は必然カ・フ・エ(Kalue)となり、ヴァイオリン(Violin)はバイオリン(Baloin)となるコーヒーを怪します、(コフィーでなしに)カフィーのみvの音を重要視するのはをかしい。

樂聖 Beethovenを御丁寧にもヴェートーヴェンと記す人がある外國語ではvの音が正しくbの音があやまりと考へる偏見に由來する。これはベートーヴェンが正しい。但し終りのvの音はドイツ語本來の發音はfの音であるが固有名詞の發音は議論があらう。ヴェンかフェンかそのところは自分は何ともよう云はぬ。

Orchestraをオーゲストラとするに至つては失笑せざるを得ぬしかし注意しやうではないかこのまちがひそのものが日本語の發音の特質から來てゐるのである。笑ひごとではないのである。筆をおぐに際し誤解を防ぐために一言する。○外國の地名、人名については右の私の主張を固執するつ

もりはない。故にイタリアの歴史上の人物の名としての Villa をヴォルタとすることに何等の反對をするものではない（しかもなほそれを日本人がボルタと呼ぶも決して不當となすことはできぬ。前述の考への徹底として）外國の固有名詞はその國の發音に従ふことが正しいと私にも思へる。Strindberg をその本國の發音に従つてストリンドベリとすることがドイツ風な發音ストリントベルクよりも正しいことを認めねばならぬ。ギリシヤの哲學者 Platon はプラトンがより正しくプレートーなる英語よみはわれわれの承服しがたいところである。Archimedes はアーキミーデイスなる英語風にでなくギリシヤ語本來の發音に近くアルキメデスとするが正しいと云はれやう。併し英國人がプレートーと呼ぶを妨げぬとすれば日本人がボルタと呼ぶも何の恥づるところがあるか。正しければ共に正しい。然らざれば『共に罪あり』だ。英語を絶對化する國辱的見解に私はくみすることができぬのだ。

○なほ工率の單位としての『ワット』についても考へていたゞきたい。Watt の英語風な發音と我々のそれとが決して同じでないことは發音辭典を見るまでもない。而し我々は『ワット』と呼んで——私の意見の反對者と雖も——敢て怪しまぬ。それでいゝのである。『ワット』で正しいのである。（七月九日）

x x

第三十一次卒業生三輪正義君より 無線電話用部分品十數個を参考品として學校へ御寄贈下さいました。余白にて失禮ですが、に記して御厚意を感謝致します。